

5年後の自分に感謝される大学生活を

みなさんは、どのような理由で経済学部に進学しましたか？目標とする職業のためですか？それとも、日々起こっている社会問題に関心があったからですか？

「勿忘初衷（初心忘るべからず）。今の気持ちを大切にしてください。

先入観を捨てる

「数学が嫌い」。過去に出会った経済学部生の中には、経済学部へ進学したけれど基幹科目（ミクロ経済学、マクロ経済学など）は履修したくない、という人がいました。私も、大学時代これらの科目を履修しましたが、正しく理解できていたかどうか……。ただ、グラフを使って直感的に理解できるものも多かったと記憶しています。自分で「手を動かして」考える、という作業も効果的です。

「もったいない」。そんな気がしてなりません。最初から「経済学=やたら難しい数学を使う学問」と思い込み、勉強を始める前から諦めるのは、もったいないことです。卒業後、「本当に経済学部出身？」とは言われたくないですよね。「食わず嫌い」をせず、少なくとも基礎は身につけて欲しいと思います。



大石 恵

MEGUMI OISHI

経済学部講師

1973年生まれ。山口県出身。京都大学博士（経済学）。専門分野は、中国経済論・中国経済史。台北を第二の故郷、大阪を第三の故郷だと感じている。飛行機と電車、そしてマンゴーについて語りだしたら止まらない。

発想の転換

嫌いな科目は何ですか？誰にも嫌いな科目はあるものです。

私にも、嫌いな科目があります。それは、英語です。高校時代からの英語嫌いは今も変わりません。

ですが、高校3年時のクラス担任の一言で、大嫌いな英語に対する意識が変わりました。ある日の二者面談のこと。

「経済学部に進学するんでしょ。だったら、英語はずつとついて回るよ。英語だと思うから余計にイヤになるよ。1つの記号だと思えばいいのよ。」

当時、「勉強についていけない→テストの成績も悪い→英語が嫌いになる」という悪循環にどっぷり浸かっていた私に、この一言はとても新鮮でした。

それ以来、英語への抵抗感も消えました。見た目もないほど嫌いな科目も、少し発想を変えるだけで違ってくるものです。高校までの勉強を思い出してください。嫌いな科目を避けて通ることはできませんでした。大学でも、自先のことばかりにとらわれず、あなたが発想を転換して、1つでも多くの科目を好きになってください。

おわりに

学生生活は、あなたの気持ち次第で充実した時間へと変わってゆきます。一生懸命何かに取り組んで、二度と体験できない貴重な時間を作り上げていってください。

はじめに

「こんな風に学んだら」というお題で文章を書くように言われて正直困りました。真っ先に思ったのは「こっちが聞きたいぐらいだ」です。おそらく高校までは、科目ごとに基本的な教科書があり、参考書があり、問題集の例題を解きそれを応用する、という形で「勉強」してきたと思います。ところが、大学で「学ぶ」ときには必ずしも、そういう方法がとれないのです。

「問う」こと

アメリカの代表的なお酒に「バーボン」があります。英語で書くと “bourbon” です。ところが、これをフランス語読みすると「ブルボン」です。フランスの王朝名だということに気づかれることでしょう。ここで「問い合わせ」が生まれます。なぜ、アメリカの酒の名前がフランスの王朝の名前と一緒になのか。また、とび職の方がよく履いている「地下足袋」は、どう見ても、地面より上で利用されています。

これらは、みな、きちんとした理由があり、尋ねたり調べたりすれば、わかることです。ただし、調べて「わかった」といって終わりではありません。ひとつわかると、またほかの「問い合わせ」が生まれてくるはずです。



中路 敬

KEI NAKAI

経済学部助教授

1969年大阪生まれ。九州大学大学院経済学研究科博士後期課程修了・博士（経済学）。専門は経済学史。趣味は水泳、楽器、カクテル作りなど。

大学での学び

大学での「学び」と高校まで「勉強」とが違うということは、あきらかです。まず、大学での開講科目すべてに、「基本テキスト」があるとは限りません。つぎに、参考書や問題集も、利用しやすいものは、多くはありません。大学は、その意味では不親切な場所なのかもしれません。

なぜ、そうなのでしょうか。大学入試までは「学ぶ」=覚える、解ける、答えられる、だったものが、大学では「学ぶ」から「問う」ことが求められるからです。つまり、各講義に対応する「問題」集がないのは、自分で「問い合わせ」を見つけてくることが「始まり」だから、といつてもよいでしょう。

なんでも関心を持ち疑問を感じよう

大学で学ぶということは、答えを知る、知識を集めるだけではないのです。知れば知るほど、疑問が増えていきます。これが大学生であることの面白さであり難しさでもあります。しかし、それをサポートするために、本学ではたくさんの書物を備えた図書館があり、それぞれの専門家がそろっています。何か学んだら、率直な疑問を先生方にぶつけて見ましょう。どんな小さな疑問でもそれを解消し、また新しい「問い合わせ」に取り組んだ経験こそ、たんなる「知識」をこえ、のちに社会人となって生きてゆく上での「知恵」となるはずです。

学びのアイディア
—こんな風に学んだら!—